
SLEEPER

黒野蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SLEEPER

【Nコード】

N5406Q

【作者名】

黒野蝶

【あらすじ】

『スリーパー』。それは人を『眠らせる』仕事。

人に悪夢を見せる悪魔・ナイトメアを討つために生まれた職。

彼らは今日も何処かで人を安眠へと導く……。

0・prologue (前書き)

あらすじでは重いダークな感じがしますが、ゆるーく書いていきます。

ダークな感じはパッと見です。パッと見。

0・prologue

＊

「おい！ いっくん！ 起きてよ！ 視えたんだってば！」

少女の声が少年の耳に響いた。

高い、声だ。しかも、透き通るような美声。声だけで、彼女の虜になる人も珍しくないだろう。少年は睡魔と格闘しながら、そう思った。

「ううー。りょーかーい……じゃ、あと5分寝かして……く……れ……」

少年の中の睡魔が勢いを取り戻し、少年を再び、夢の中へと引きずり込もうとする。

あ、もう無理。寝ます。少年がそう思った矢先に、ある考えが浮かんだ。

その考えは睡魔の勢いを弱めさせて、少年の口を開かせた。

「――おき……起きるから……パンチラ……お願いしまーす」

少年は、そう言うと、幸せそうな表情を浮かべて、彼女の行動を待った。

「……いい加減にしなさい！！」

「ぐへっ！！」

少女が少年の腕を取り、体を捻る。

少年の体が寝ていたベッドから少し浮き、次の瞬間には床に叩きつけられていた。

ドン！ と大きな音がして、少年は悲鳴を上げた。

「痛い！！ ツ~~~~~~~~痛えな！ 楓^{かえで}！！」

背中を抑えながら、少年は目の前に突っ立っている少女に目を合わせる。

「痛い、じゃなくて、遅い！！」

楓と呼ばれた少女は、艶やかな楓色の長い髪を頭の後ろで束ねていた。

俗に言う、ポニーテールという髪型だ。

顔は、驚くほど整った顔立ちで、可愛らしさと共に凛とした雰囲気も兼ね備えていた。

鼻筋はピシッと通り、怒りの色を見せる眼は少年をキツ！と睨みつけている。桜色の唇が、今はへの字に曲げられている。

背は160センチに満たないが、胸は大きく膨らんでおり、Eカップはくだらないだろう。

少女の名は、卯月楓。うつきかへで17歳。

セーラー服を身に纏っていた。

そして、床に仰向けに倒れている少年の名は夢藤樹。むとういつき17歳。

ここまでは、普通だ。

しかし、これからは普通じゃない。

身長143センチ、体重36キログラム。

まるで、小学生のような体格をしている。

病氣、というわけではない。

だが、成長が遅い、というわけでもなかった。

髪の色は群青色。これも染めているわけではない。

髪型は、無造作で、寝癖なのか癖毛なのかわからないが、アホ毛が前髪からピヨンと上に向かって突き出していた。

顔も小学生のような顔で、小学生男子特有の可愛らしさというものが滲み出ている。

その顔は、今、とても幸せそうだ。

「あ——楓。朝っぱらから、お疲れ様です。今日はピンク……か」
床に仰向けになっている樹には、見えたのだ。スカートの中が。

樹は、右手を頭の横において、楓に敬礼する。

「がっ！！」

楓は、そんな樹の顔面を白いニーソックスを履いた足で踏みつけ

た。

「もう！！　こんなことしてる場合じゃないでしょ！　見つけたの」
「み、見つけた……そうか……で？　誰だった？」

樹は、鼻を抑えながら訊き返す。

「うん。クラスの子」

楓は、スカートを抑えながら、その場から数歩後退りして、言った。

「そうか……じゃ、俺も学校に行かなきゃな」

樹は起き上がると、急いで支度を始めた。

0・prologue (後書き)

毎週土日のどっちなに更新していきたいと思ひます……できればで
すが……

1・Endless of the nightmare

赤い土の上に敷かれたアスファルトを一人の少年が息を切らしながら走っている。

服装はマラソン選手が着るユニフォームだった。

前髪が目にかからないようにワックスで上に立ててある。

襟足も短く揃えてある。

顔もそれなりに整っている。

そんな少年は、永遠とも思えるこのアスファルトを延々と走り続けていた。

途中、石ころにつまずき、転んだ。

その瞬間、少年の周りには、大勢の人が立っていた。

人ごみは少年を責める。

何で転けたんだ、大事な場面で、期待していたのに残念だ、と。

「やめろ……やめて……やめてくれええええ！！！」

少年の叫びは彼らには届かなかった。

叫びは小さな部屋に響くのみ。

少年は、ハッとして我に返った。

「……ゆ、夢……か。また……」

寝汗でシーツはぐっしりと濡れていた。

「……ここ一週間、連続だ……おかげで……気分が……」

本来、体力を回復するための睡眠で逆に疲れている。

今の少年はそんな感じだ。

少年の名は、片白幹也。かたしろ みきや

高校2年生。

部活には所属していなかった。

幹也は額に手を当て、熱はない、ということを確認する。

「はあ。もう……」

渋々といった表情でベッドから起き上がり、部屋を後にした。

「行って来ます」

幹也は先程までとは違い、元気な様子で家を飛び出した。

右手には鞆の取っ手が握られていた。

幹也は通学路を走る。

歩いて也十分に間に合う時間だったが、いつも走って通学していた。

理由は特に無かった。

いつもと変わらない通学路に幹也は内心、ほっとする。

あんな夢を見たんだ。現実には爽やかがいい。

そう思った。

10分ほど走り、学校に到着した。

私立神柳かみやなぎ高等学校。

それが幹也の通う高校の名だ。

全校生徒600名。普通科と特別進学科の学科があり、普通科は5クラス、特別進学科——通称、特進は1クラスで構成されている。幹也は普通科の2年2組に所属していた。

「……」

無言のまま、教室のドアをガラツと開ける。

今日も1番か？ と頭の中をよぎる。

幹也はいつも最初にこのクラスに入る。友達と一緒に入る時もある（その時でも、友達より先に足を踏み入れる）が、大抵はひとりで、1番先に入室していた。

それ故、挨拶などしなかった。むしろ、後から入ってくるクラスメイトにはようと言う立場である。

しかし、今日は違った。

「おはよう。片白くん」

「！ お、おはよう？」

人が居るとは思わなかったもので、疑問形で返してしまった。

「――卯月さん。今日は早いね……」

地味に2年生になってから、毎朝、1番に登校しようと記録を自分で付けていたのに……と少しショックを受ける。

今日、自分より早く入室していた人物は、卯月楓。

校内でも美人と評判の人物である。

ポニーテールの髪を揺らしながら、彼女は幹也に近づいた。

「ねえ、知ってる？ 今日、転校生が来るんだって」

「そ、そうなの？ こんな時期に珍しいね」

今日は確か5月20日と記憶していた。

親の都合かな、と幹也は思う。

「どんな子が良い？」

楓は少し笑って幹也に訊く。

「どんな子……って……不良は嫌だな……」

美人にこんな近くに迫られるのは、ちょっと……と思って、少し後ずさりながら、言う。

幹也の答えに楓はクスと笑い、「そうね……」と言った。

「……不良……じゃなきゃね……」

「？」

何やら意味深な発言だったな、と感じたが伏せておいた。
下手に首を突っ込んで嫌われるのは嫌だった。

キンコンカンコン。

チャイムが鳴ったホームルームの始まりだ。

（転校生……か。どんな子かな？）

楓に聞いた話を思い出して、幹也はホームルームに臨んだ。

「えー諸君、今日もいい天気だ。ということでおはよう」

こう挨拶したのは担任の空草翠先生だ。
からくみどり

黒いショートカットの女教師で、美人先生として校内でも人気を博す人物だ。

「えー……今日は転校生を紹介するぞー。入ってきたまえー」

廊下に居るらしい転校生に空草は、そう告げる。

そして、ガラッ！と勢い良くドアが開けられた。

「よし！！紹介するぞ！ 夢藤樹君！ みんな、仲良くするように！！」

空草がそう告げた生徒は、驚くほど小さかった。

上にピンと伸びたアホ毛が特徴的で、小さい体に良く似合っている。

身長150センチに満たないであろうその生徒は、開口一番こう告げた。

「夢藤樹、17歳！！好きなモノは女子！！嫌いなものは男だ

！！ 女子生徒の諸君！！ぜひ仲良くしよう！！」

幹也は思った。

僕の爽やかな朝は終わったな、と。

「キャー！！！！ カワイイー！！」

クラス中から女子の黄色い声援が上がる。

それもそうだろう。

こんな17歳がいるのだから。それも言うことがぶっ飛んでいる。
「樹くん！ こっちの席空いてるよー！」

「抜け駆けしないでよ！！ 私の隣の男子と代わってー！」

など様々な声上がる中、樹は幸せそうな表情を浮かべていた。

（フハハハ！！ 女子高校生、最高ッ！！）

「えーとお、どうしようかなあ……」

と樹は可愛く演じ、さらにクラスの熱が上がる。

(ぬふふふ……最早、このクラスの女子は掌握したッ!!)

樹はそう思っていたが、ひとりの女子によって、その考えは消えた。

楓である。

窓際最後尾にいる女子生徒、卯月楓が、自分の隣の席を指さして、
来い！ と無言のまま言っていた。

樹はそれを見て、凍りついた。

(し、しまった——!! あいつの存在を忘れていた——!!)
チツと誰にも分からないように舌打ちし、空草に言った。

「う、卯月さんの隣で……いいです……」

樹に対するクラスの黄色い声援は消えたが、視線が代わりに集まる。

それはほとんどが女子のものが、男子からの憎しみの視線も混ざっていた。

樹は女子の視線は目聡く感じ、笑顔で応える。

そんなことを繰り返していると、隣から低い声で、「……いっくん……」と聞こえてきた。

「は、はい……」

樹は思わず凄み、体を縮ませる。

「目的……忘れてないよね？」

「勿論だ。で？ どいつだ？」

「あの子」

楓は視線で逆サイドの廊下側の最後尾に座る片白幹也を示す。

幹也は下を向いて、何か読書をしていた。

「……あいつか……」

放課後。

幹也が校門を出て、自身の下校ルートに入ったとき、道の脇からひとりの人物が飛び出した。

「だ、だれっ!？」

幹也は思わず後ずさりし、少し身構える。

「……片白幹也……16歳。生年月日は1994年9月10日。血液型はA型」

自分のプロフィールを淡々と述べるのは転校生の夢藤樹だった。

「! き、君は……夢藤くん？」

樹は幹也の反応を気にせず、紹介を続ける。

「――帰宅部。好きなモノはカレーライス、嫌いなものは特に無し。家族構成は父と母、それに妹の四人家族。中学は神柳中学校。所属していた部は陸上部。校内マラソンで一位、全国駅伝に選ばれる実力の持ち主だった……ふう……単刀直入に言うが、お前、まだ走り足りないんだろ」

幹也は最後の言葉に反応する。

「……そんなことないッ!! だ、だいたい、何で君がそんなことに首を突っ込むんだ!!」

「おいおい……最後のセリフは、まだどうにかしたい、って思ってるヤツが言うセリフだぜ？」

樹は外見とは反し、若干大人びたセリフを口にした。

「!! ……ち、違う! 僕はもう! もう……!」

「見てるんだろ? 悪夢」

「う、五月蠅い!! 君には関係ない! 君には……うっ!」

幹也は口を抑えた。

突然の吐き気が彼を襲った。

地面に蹲り、吐き気を抑えようとする。

その時だった。

幹也の背中から何やら黒い闇のような色をしたモノがずるずると出てくる。

それは、完全には出ずに、幹也の背中から突き出たような感じで姿を留める。

ぐによぐによと動いて、姿を安定させる。

そして最終的にはカマキリのような鎌を持った生物へと形を変える。

「……出たな……ナイトメア!!」

樹の手には先程までは持っていなかった銃が握られていた。

2・Dreams

「夢藤……く、ん……?」

幹也は薄れていく意識の中で、確認するように言った。

樹の目に映るは、身長170センチほどの男。

顔は少年と青年の間あたり。

髪型は夢藤樹のものと同じ。

ピョンとはねたアホ毛と言うべき髪が特徴的だった。

服装は神柳高校の制服で、サイズは、夢藤樹のものならばこんなに大きくはないはずだが、幹也と同じくらいの大きさだった。

そんな男の手には黒い銃が握られている。

「――さて……今回は銃か……。姉さんほど巧く使えないが、仕方ないな」

男はそう呟いて、幹也の背から半分ほど突き出しているカマキリ型のナイトメアに向けて発砲した。

パンン!! パンン!!

銃声が幹也の鼓膜を揺らす。

銃口から弾きだされた銃弾はナイトメアに向かって一直線に飛んでいく。

その刹那、銃弾がカランと音を立ててアスファルトの地面に転がった。

銃弾は真つ二つになっていた。

ナイトメアがその自慢の前肢というべき鎌を使い、斬ったのだ。

銃弾のスピードは遅くても、195m/s。速いものであれば音速を越える。

どちらにせよ、人の目では見切ることは不可能だ。

それを、目の前の怪物は見切り、斬り裂いたのである。

これがどれほど凄惨なことなのか、どんな子どもでも容易に理解できるだろう。

「！ 斬った……予定通りには行かないか……」

そう言うと、男は学生鞆の中から何やら小袋を取り出して、それをナイトメアの上へと放り投げる。

ナイトメアの真上あたりで袋の中から植物の種のような物が飛び出し、弾ける。

すると、ナイトメアが姿を消した。

「……今はこれくらいしかできないな……」

男はそう言うと、意識を平常に取り戻したらしい幹也のもとへと駆け寄る。

「幹也！ 大丈夫か！！」

男は、そう言って、幹也の背をさする。

「う……な、なんとか……それより、君は……？」

「何言ってるんだよ。俺だよ」

男の声が少しずつ高くなっていったかと思うと、

「夢藤樹だ」

完全に小学生チックな姿をした夢藤樹へと変わっていた。

「へ……？」

「？」

「え……！！！！……？」

「んだよ……そんなにおどろくこたあねえだろ」

小学生サイズへと『戻った』樹は未だに信じられない様子の幹也に言う。

ふたりは今、夕焼けに染まる道を並んで歩いている。

「いや……誰が見ても驚くよ。そんな体質……？ 体質……なの？」

「ちげーよ。これは『呪い』だ」

「……？ 呪い？」

「おう。お前もさっき、見ただろ。『ナイトメア』をよお」

「ナイトメア……？ それって悪夢ってこと？」

「違う。お前の背中から出ていた気色悪いバケモンだ」

樹がそう説明すると、幹也は納得したように手を叩く。

「ああ……はつきりとは見てないけどね……あれって一体……？」

「あれはな……『人に悪夢を見せて精神を食らう悪魔』だ」

「悪魔？」

樹は、そうだ、と言って続ける。

「ナイトメアは夢と現実の狭間——此处とは次元が違う空間に生息する生物だ。その姿は、えと……こういう時はなんて言うんだっけ」
「千差万別？」

「お！ そうそう！ それそれ！ ——で、食料として動物の精神を食らう。悪夢を見せて心を揺さぶって、体乗っ取り、内側から破壊していく。性質の悪い奴らだ」

樹が言うには、精神的に不安定になると、ナイトメアに憑かれやすく、危険らしい。

「へえ……じゃあ、夢藤くんは何なのさ」

「俺か？ 俺はソイツらを倒すべく存在している職業、『スリーパー』だ」

「スリーパー？」

樹は、ああ、と簡単に返す。

「スリーパーってのは、この世に蔓延るナイトメアをぶっ倒し、人々を快眠へと導く！ そう！ 正義のヒーローってとこだ！ ！」

樹はそう言って、親指を立てる。

「スリーパーになったヤツは特別な能力を持っていてな……俺の場合は夢装アームズって言って、夢で見た武器を現実のものにする能力だ」
幹也はそれを聞いて、ハツとする。

さっきの銃はそれだったのか、と。

「まあ、見ていた夢に左右されちまうヘンテコな能力だけだな」

「そ、そんなことよりも、『呪い』って一体？」

「ああ。俺は一年前にあるナイトメアに呪いをかけられた。躰が小

さくなるという呪いをな」

樹は、自分の小さくなった手を見て、憂うように言った。

それを見て、幹也は黙るしか無かった。

「……俺は必ず呪いを解く。そのためにあるナイトメアを探してるんだ……。まあ、この話はこのくらいで終わり！ 次の話に移るぞ！！！」

「次の話？」

「ああ。今から事務所に行くぞ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406q/>

SLEEPER

2011年2月6日21時10分発行